

---

# かしましょうか

五線譜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
かしまじょうか

【Zコード】  
Z5317J

【作者名】  
五線譜

【あらすじ】

「ごく普通の女子高生・鹿島翔香は、ある日自分が昨日の記憶を喪失していることに気づく。そして、自分の日記を調べると、昨日の自分が書いたと思しき、見覚えのない文章があつた。「あなたは、今、混乱している…若松くんに相談しなさい。最初は冷たい人だと思うかもしれないけど、彼は頼りになる人だから。」学校でも秀才の噂高い若松和彦は、翔香が一種の時間移動現象「タイム・リープ」に陥ったことを突き止め、時間のパズルと格闘していく。ヒーロー若松和彦の視点から描く『タイム・リープ』あしたはきのう』

## (前書き)

原作『タイム・リープ』あしたはきのつ（高畠京一郎）を知らなければ理解しにくい内容となっています。また、ヒーローの心境を勝手に解釈しています。

### 【日曜日】

今日も充実した一日だった。心ゆくまで読書にいそしむことができた。このところの愛読書は世界的な科学雑誌だ。やや難解だが、興味があるところしか読まないし、わからないことは調べればいい。ある程度は理解することができていると思う。

妹の美幸は、友達と映画に行って、日曜日を謳歌してきたらしい。「お兄ちゃんも健全な高校生なら、籠つてばかり出かけたら？ 彼女とでも」

帰つてくるなり、余計なことを言つてくれる。最近、ますます口うるさくなつてきた。

俺は女という生き物にまつたくの期待を持つていない。

美幸くらい能天氣であれば害も少ないが、大抵の女は浅はかで、ヒステリックで、そばにいられると頭痛がしてくる。ニコニコと作つた笑みを振りまく裏で、どれほどあざといことを考えているのか

過去に苦い経験があつたため、多少主觀もあるだろうが と

にかく、厄介な生き物だと認識している。

生物的な意味でまつたく興味はない……とは言い切れないところが俺も男だが……。

女と限らず他人と深く関わりたいとは思つていない。最低限の付き合いは自分の時間が拘束されず、かなり過ごしやすい。

いまはまだ……いつか、変わるのかもしれないが……。

### 【月曜日】

今朝、クラスメイトの鹿島から突然挨拶された。親しく話したことはなかつた相手だったので少し驚いた。抜きんでるような美人ではないが、少し緩んだ目元にはかわいげを感じる。いかにも平和そうな奴だ。

さらに昼食前の休み時間、どういう巡り合わせか、階段から落した鹿島を助けた。先ほどの、平和そうだという評価は取り消す。

鹿島翔香は、危機管理能力が足りない危なっかしい奴だ。

完全に密着して受け止めたので、偶然通りかかった野郎どもにからかわれる羽目となつた。多少おいしい思いは味わつたが……いい迷惑だ。下手をすれば二人とも怪我をしていた可能性もある。巻き添えは勘弁してもらいたい。

### 【火曜日】

普段通りの一日だつた。学校の授業は退屈である。高校レベルの理数系の科目の内容はほとんど理解してしまつてゐるから、もう少し上のレベルに手を出してみよつと思つ。

懸賞付きのクルスワードパズルがはかどつた。

### 【水曜日】

さて、奇妙なことが起つた。正確には俺ではなく、鹿島翔香に、だ。よくわからない形で、俺も巻き込まれる羽目となつた。まず、朝からやたらと視線を感じたから、なにかあるなとは思つた。予想は当たり、昼休みに図書館で鹿島に話しかけられた。何度も言つように、鹿島とはなんの接点もない。

告白……？ そんな考えが一瞬頭をよぎつた。

相談があるという。その内容は、本当に突飛なものだつた。どんな冗談を吹つかけてきたのか。到底信じられるものではない。いまも、半信半疑だ。一番おかしなこととして、なぜ俺にそんなことを相談するのか 鹿島自身もわけがわからぬといつのに まったく理解できない。どうやら、鹿島自身の日記に、俺に相談しようと書いてあつたらしいが……。まったく筋の通つていらない鹿島の理論展開に、呆れるしかない。

最初は邪険に扱つて追い払つたが、後に思い直して鹿島を追つた。

冗談にしては突飛すぎるし、中途半端に話を振られたままのはず

つきりしない。退屈しのぎにもなるかもしれない、と軽く思ったのだ。

中庭で、鹿島を呼び止めると、彼女はむくれていた。わかりやすい奴だ。

そのとき 上から何かが降ってきた……！

俺は反射的に鹿島を突き飛ばし、身体の下にかばつっていた。原因の植木鉢は真一つに割れていた。おかしい……こんな中庭まで、偶然落ちてくることなどあるだろうか……？

幸い、二人とも怪我はなかつた。事なきを得たわけだが、その後の鹿島はさらに様子がおかしかつた。青ざめ、震えていた。保健室に連れて行つたものの、無関係の俺を捕まえ離さない。保健医に余計な気をまわされて、授業をすっぽかして保健室に残る。しかたなし、事情を聞いてやる。

鹿島は、告白した。明日へ行つてきた、と……。本当だとしたら、こんな奇妙なことはない。

本人曰く 月曜日の記憶がないことが発端で、ついさっきまで水曜日を過ごしていたと思つたら、いつのまにか木曜日になり、階段から落ちて、水曜日に『戻ってきた』らしい。

まったく信憑性のない話だが、その証明のために、明日鹿島は数学のテストで百点を取るという。そう宣言する鹿島は、嘘をついているようには見えなかつた。

嘘か、本当か、明日になればわかる。タイムトラベルか……冗談にせよ、実際に言つてのけるあたりがユニークだ。もし本当なら、興味深い。

それについても、鹿島はかなりの頻度で階段から落ちている。危なつかしい奴だという評価は間違いではない。

### 【木曜日】

濃い一日だつた。

鹿島の言つことを『信じたふり』をして、これから鹿島と会う度、

いつから来たのか確認することにした。一時間目から遅刻してやつてきた鹿島は、俺の質問に怪訝そうに答えた。なるほど、俺が今会っている鹿島は、鹿島の時間で言つ『過去の』鹿島らしき。ややこしいが、眞実は数学の時間に分かる……。

予言は 当たつた。

鹿島はただ一人満点をとつた。天文学的確率とはもちろん「冗談としても、偶然だとは言い難い。鹿島の話を信じてやらねばなるまい。」そうすると、今日の掃除の時間、彼女はまた階段から落ちるはずだ……。

俺が先回りしていると、鹿島は本当に落ちてきた。受け止めると同時に、思わず苦笑いがこぼれる……だが、我に返つた鹿島は、ひどく取り乱していた。どうやら、また未来を見ていたらしい。彼女を落ち着かせようと、俺は必死に語りかけた。

「お願い……もう、一人にしないでよ……」

ずいぶんいじらしい台詞だ。これが演技なら、拍手喝采を送つてやるところだが……思いがけず、心を動かされたことは認めよつ……。

肩に頭をよせてくる鹿島を、俺はそのままにしていた。腕の中にすっぽり収まつた鹿島はやわらかく、髪からは芳しい香りがした。以前も似たように受け止め、呑気な感想を持つたが、あの時とは鹿島への関心が違う。鹿島は、厄介な状況に立たされている。不意に、俺を頼つてくる鹿島を守つてやらねばといつ気持ちがわき起つた。

気の迷いか……？ 俺もやきがまわつたものだ……。

実際、未来へ行つたり それはまだしも 帰つてきたりするなんてことが日常生活に起きれば、誰でも混乱し、恐怖するはずだ。所詮他人事だが、俺でなければならない理由がなにがあるというなら、そう簡単に見捨てるわけにもいかない。

ギャラリーにからかわれたことに気がついた鹿島は、あわてて俺から離れた。『今』がいつか教えてやると、なんとか状況を飲み込

んだ。女は面倒くさい生き物だが、鹿島は下手に騒ぎ立てる事はせず、素直に状況を受け止めようとすると、俺も対応しやすい。

鹿島がなんとか落ち着いたので安心した。

金曜日を過ぎて、鹿島は、下校途中に車にひかれそうになつたらしい。明日の俺は、色々な状況を理解している風だつたらしいが、自分の未来の様子を聞くのはかなり不思議な感じだ。鹿島になにも教えなかつたそうだ。

俺自身のことだというのに、わからない。順当にいけば、明日の俺は、今日の俺より賢くなつているのだろう。それは喜ばしいことでもあるが、わずかにプレッシャーもある……。

とにかく、鹿島を信じると決めた。よつて、改めて真剣に鹿島の話を聞く必要があり、俺は一つの提案をした。

「私の家に来るのね？」

なるほど、明日から来たのなら、知つていて当然なわけか……。

鹿島の話では、家には母親しかいないはずだつたが、どうやら父親も帰つていたらしい。妙に勘ぐられた会話が聞こえて、俺以上に鹿島がやきもきしていた。いかにも女子の部屋な鹿島の部屋で一人きり……色々な意味で、あまり長居はしないほうがよさそうだ。さつさと本題に入る。俺に相談しろと書かれていた日記も見せてもらつた。『最初は冷たい人だと思うかもしれないけど、彼は頼りになる人だから』か。鹿島は弁明したが、これは『未来の』鹿島が書くことなのだ。冷たい人とは余計なお世話だが、その評価はこれから変化するらしい。照れ臭さを隠し、気を取り直して、鹿島の話をメモしながら聞いた。

鹿島は俺という相談相手を得て、安堵したようだつたが、これはどう足搔いても、鹿島の問題だということを自覚してもらう必要があつた。俺にできるのは手助けだけ。絶対に解決してやれるという過信もなければ、鹿島に対して責任があるわけではない、それは本当だからどうしようもない。

正直に伝えると、鹿島は悔しそうに唇を噛んだ。

妙に、そそられる表情だった。鹿島は思ったことがすぐに顔に出る人間だ。作った表情をするよりも、そのほうがよほどいい……。

スケジュール表を作つて整理すると、このわけのわからない現象の法則が見えてきた。『タイムトラベル』ならぬ『タイムリープ』

意識時間の逆行である。こんなことが、現実に起ることがあるうとは……世界屈指の科学者たちも、さぞ驚くだろう。俺はこうして実体験者の鹿島を目の前にしている。よく考えれば、かなり稀有な事件に巻き込まれたのだ。退屈しのぎどころではない。これはかなり厄介だが、好奇心も疼く。

鹿島にゆっくり説明してやると、ようやく彼女も理解してきた。結論として、過去は変えないほうがいいという立場を明確にする。自分自身が考えを突き詰めていく中で、金曜日の俺が鹿島に対して情報管制を行っていた理由もわかつた。

とにかく、過去を変えないためには、鹿島も俺も失敗は許されない。慎重に行動しなければならないが、意識しすぎてもまずい。だから、『予備知識』の扱いが難しいのだ。鹿島は危なつかしいので、厄介な部分は否応なしに俺が背負つたほうがいいだろう。

鹿島の意識時間を元に戻す手始めに、飛ばしてきた空白を埋める必要性は絶対だ。リープする規則性も、大体わかつてきた……よつて……。

しぶる鹿島を説き伏せて、俺は一つの実験を試みた。うまくいけば、鹿島は月曜日に行つてくるはずだ。

案の定、椅子を傾けた一瞬の間に、鹿島は月曜日に意識だけ旅行してきたようだ。結果、つまりテストはばっちりだつたらしいが……思わず俺の理論の間違いを指摘されて面食らつた。矛盾か、あるいはまだ不完全なところがあるらしい……くそ……すつきりしない。だが、焦らずじっくり考えてみるしかない。

月曜日の報告の中でも、俺にも思い当たることがあった。あのとき階段から落ちた鹿島は、確信犯だつたらしい。俺もずいぶん信用さ

れたものだ。……いや、半信半疑だからこそ、リープできたと考えるのが妥当だろ？ 鹿島は慌てて帰ってきたらしいが、その行為に意味がないということは、わかつていなかつたらしい。そそつかもしれないというかなんというか……。

新たに、謎も増えた。月曜日を感じたという後頭部の痛みだ。鹿島に覚えはないと言うが……。

突き詰めていくと、リープの発端は月曜日の夕方にあることがわかつたが……鹿島は無意識的に、そのことを思い出すのを拒んでいた。本当に、思い出せない……思い出したくない、よほどのことがあつたのだろう。鹿島が思い出せば、かなりの情報が得られるはずだが……。それ以上追いつめることはできなかつた。そして、俺の中に、一つの仮説ができていた。

リープの回数が多い つまり、この一週間鹿島が危険な日に遭う回数が多くすぎる。階段落ちはともかく、鹿島は誰かに命を狙われている 考えれば考えるほど、その仮説は外れていないような気がした。鹿島を下手に怯えさせても仕方ないので、冗談めかしたが……。これからは鹿島から目を離さないほうがいいだろう。そのことを伝えると、思わず返答が来た。明日の俺は、鹿島を一人で帰すらしい……。だが、金曜日の俺の行動は、鹿島は知らないはずだ。  
……誰も 正確には明日の俺しか、知らないことなのだ さきほどどの不完全だった点が、急に明るみになつた。あれはミスではなるほど、俺の理論は間違っていない。

俺は確信を持つて言った 金曜日に来てほしい、必ず護る<sup>1</sup>。鹿島はしばし俺を見上げ、もう一度その約束をせがんだ。真意はわからなかつたが、俺はもう一度確かに約束した。

鹿島は満足そうに微笑んだ。不安げな顔にはそそられるものがあつたが、安心しきつた笑顔には俺側のぬぐいきれない不安を吹き飛ばす力があった。

真剣に、本気になると決めたのだ。自分ができることは必ずやる。

拒否することもできたはずだが、なぜか 好奇心に負けたのか、ここまで首を突っ込んでしまったのだ。この不思議な現象を、解明できるものなら解説したいという欲求もある。俺は改めて気を引き締めた。

### 【金曜日】

昨日の約束通り、鹿島を迎えて行くと、ひどく驚かれた。今日の鹿島は水曜日から来たのだ。

何かと説明を求めてくる鹿島をかわしながら、まずは数学の勉強を見てやつた。……このままの状況では、満点はおろかその半分も怪しい……このままの状態で満点をとる確率は間違いなく天文学的数字だ……。午前中一杯使って、テストの内容を鹿島に叩き込んだ。昼食も一緒にとつた。美幸特製の弁当を、最初は微笑ましそうに見ていた鹿島だったが、その後なにやら考え込んでいた。

鹿島を学校に行かせて、俺は昨日の仮説を確かめるために動いた。一応学校を休んでいることになっているので、慎重に行動する。

焼却炉で植木鉢を回収し、水曜日の状況確認を行う……やはり、植木鉢は故意に落とされたとしか考えられなかつた。美術室、音楽室、屋上のいすれから、鹿島を狙つて……。

鹿島を狙う者はこの学校に入り込めて、不振がられない人間 生徒、あるいは教師しかいない。どうしたら、その犯人を割り出せるだろうか……。俺は俺の能力を総動員させ、難解すぎるパズルの全体像を探る。水曜日は、すでに過去だ。だが、まだ水曜日に間に合つ鹿島の月曜日の後半が残つている……。

放課後、学校から出てくる鹿島をこつそりつけた。尾行のようなことは慣れていなかつたから、うまくできたとは言い難い。不安そうに歩いていた鹿島が、急に走り出した。見失わない様に、俺も必死で後を追う。

突然、一つの眩い双眸が 鹿島の目の前にきらめいた。

来た……！

その一瞬、全力で走った。

鹿島を確かに腕に抱きとめたまま、慣性の赴くまま、土手を転げ落ちる。

怪我がないことを確認して、俺はすぐに土手を登った。けたたましいタイヤの音とともに、車は走り去ろうとする。あたりは闇に包まれていたが、車体の真ん中に見えるはずの物からは、どれだけ目を凝らしてもナンバーを読みとれなかつた。

確信犯。

俺も、気が高ぶっていた。冷静ぶつていられる内容ではなかつた。本気で、人ひとりの命が狙われている。鹿島の命が……。

蒼ざめる鹿島を、なんとか家まで送る。安全な場所に落ち着いて、昼間推理したことと、今後の作戦を鹿島に伝えた。

鹿島にも思い当たる節があつたらしい。鹿島の友人たちの行動は、遅ればせながら『予備知識』となつて、俺の理論の正しさを謳つていた。あとは、過去に……未来に？ 行ける鹿島に、任せらしかなり。

さて、今度はどうやって鹿島をリープさせよつか……。

鹿島に月曜日の任務を説明しながら、俺はリープする手段を考えていた。身体の外傷的な安全を保証したうえで、鹿島には思いがけない怖い思いをしてもらわなければならない……。

用を足しに行く振りをして、キッチンの鹿島母の様子を気にしながら、そのあたりのクッショングやぬいぐるみを確保していく。鹿島家の階段は途中でくの字に曲がっているので、実際に落ちる段数はたいしたことはない。だが、多少の罪悪感はある……。迷いながらも準備を整えて部屋に戻ると、鹿島はまだ名簿を探していた。確かにゆっくり探してくれとは言つたが……。

両膝をついて本棚の下段を覗き込むようにして名簿を探している

鹿島を見て、ふと邪な思いが頭をもたげた。

制服のスカートの裾が、鹿島の動作に合わせて上下している。見え隠れする白い脚が、まるで……まるで……？

気を取り直して、本題に戻る。自分の理論から導いた名簿のありかを伝えると、鹿島は感心したように俺を見た。そういう目で見られるのは、悪くない……。

細かなことを確認して、いよいよリープしてもらひ下りとなる。鹿島は先回りして、前回と同じように椅子に腰かけた。だめもとで同じことをしてみたが、やはりリープできない。

こちらとしては予想していたことだが、鹿島は不思議そうにしている。俺を信じ切っているからだと黙つてやると、鹿島の顔が赤らんだ。

鹿島が俺に対しかなりの信頼を寄せていることを、俺もうぬぼれでなく自覚していた。現に、このタイムリープ現象の真つただ中にいる鹿島は、これを解決するために俺を頼るしかない。未來の鹿島自身が言つたことでもあるし、俺も真剣に応えようと決めた。どこが始まりなのかわからないが、そういう巡りあわせなのだろう。そう。鹿島は、俺を信頼している……。

現に、男と二人きりで部屋にいるといふのに、まったく警戒心を抱いていない。もちろん鹿島のおかれた状況は、それどころではないのだが……。

リープさせるために例えば、俺が鹿島を襲うといふのは……？  
あくまで『ふり』だが……。

いくら信頼しているからといつても、男として俺に襲われて、平氣でいられるとは思わない。鹿島はリープするだろう。

まずは……理由をつけてベッドに導いて……不意に押し倒す。抵抗しようとする両手は、片手で封じ込めてしまえばいい。それから……細い首筋に唇を寄せて 鹿島はどんな反応をするだろう  
白い脚を辿るようにスカートの中に手を這わせたら……。

「じゃ……どうするの？」

鹿島の声で、暴走しかけていた思考が我を取り戻した。

愕然とする……。いまの俺は、本当に俺か……？

心の中で自分を叱咤し、例の仕掛けに鹿島を導いた。実行の直前、ごめんと言ったのは、さつきまでの妄想と、これから起ることの両方に対する謝罪だった。

鹿島は滯りなく落下し、角で止まつた。目をぱぱぱさせてクッシュョンにつすもれていた。幸い、ひどい怪我はないようだ。鹿島母も出てきて、俺は愁傷な青年を演じる。思わぬ振りをもらつてしまつて、すぐに反応できなかつたが……。

鹿島の抗議はもつともだつたが、これが一番確実だと思ったのだ。『安全』ではなく、『信頼』の意味で、間違つた判断ではなかつたはずだ。

鹿島は月曜日を最後まで済ませてきていた。俺も、余計なことを考へている場合ではない。電話を借りて、関の家に電話をかけた。他人は信用できないが、関なら信用できる。鹿島家の近くの公園を待ち合わせ場所とし、俺たちは連れだつて外に出た。

夜の公園の、街灯の下で関を待つ。鹿島が少しそわそわして見るのは、単に不安だからだろうか。それとも男として、俺を多少意識しているのだろうか……。俺は先ほどの暴走を遠くに追いやるよう、さぞ平然として見えるように振る舞つていた。物語は佳境に来ているはずだ。余計なことは、今は考えない……。

関がやってきた。鹿島と俺を、不思議そうに見やつている。俺がその視線に憮然と応えると、物分かり良さげに笑つた。余計なことを言われずにするんだのはいいが、相変わらず食えない奴だ。関が見せた二通の手紙は、間違いなく鹿島が書いたものだつた。やはり、俺の理論は間違つていない……。そう確信を深めた矢先、思いがけない返しを食らつた。

四通目。それは、日曜日の鹿島が書いたであろう手紙だつた。

鹿島と関を残し、離れたところで慎重に手紙を開封した。まず、二通に目を通し、一つの名前に田星をつける。そして予定外の、四

通用。

驚愕させられる内容だった。

日曜日の夕方、神社の境内で英語教師の中田に襲われた鹿島は、頭を打つた衝撃と恐怖で最初のリープをしたのだ。

明日にあたる土曜日、俺は中田を呼び出す。そして、内ポケットに手を入れた瞬間、俺は脇腹を刺される……。鹿島はその恐怖で日曜日に戻ったが、関から教わった護身術でなんとか無事に逃げられ、この手紙を書いているという……。恐ろしい未来が綴られた手紙。四通目の文面からは、時間を再構成させてまで俺の無事を願い、一人で戦おうとする鹿島の必死の覚悟が伝わってきた。

時間が再構成されてしまえば、俺もすでに今の俺ではなくなり、鹿島との関わりもなくなるはずだ。だが、鹿島一人で、このタイムリープ現象を解決できるとは到底思えない……。

元々、俺は冷たい人間だと言われる。事実否定はしない。他人に興味がないから、他人のためにあくせくするなんて、あまりに馬鹿馬鹿しい。

だが……。

時間が再構成される　俺は鹿島のことなど気にもせず　気にする理由すら見いだせないまま　俺は別の俺になる。今の俺とは違う俺。『タイムリープ』のことなんて知りもせず、科学に絶対な信頼を寄せている俺。今の俺ではない俺が、それでもなお鹿島を助けてやれるという自信は持てない。

すると、鹿島の歪んだ未来はどうなる……？

離れたところで関と話をしながら待っている鹿島をそつと見やつた。鹿島翔香　まつたくの赤の他人だ。自分自身がナイフで刺されるというリスクを背負つてまで、これ以上関わる必要が、一体どこにある……？

鹿島も、逃げると言っている……。

俺を死なせたくない、逃げる、と……。

俺は、どうしたい……？

ゆっくり息を吐いて、自分の心に問いかけた。

関わってしまった。関わることを選んだのは、自分だ。卵が先か、鶏が先か……どじが始まりだったのだろう。そして、どじしたら終わるのか……。

俺は……。

終わらせたい。

終わらせたいのなら……覚悟を決めるしかなかつた。

戻った俺を、鹿島は不安そうに出迎えた。

覚悟を決めた緊張感から、意識せずにいると顔が強ばってしまう。鹿島に余計な心配をかけないよう、せいぜい気をつけよう。情報管制という名目を使って、俺は鹿島に何も伝えない。ただ、関に鹿島に護身術の稽古をしてほしいと頼む。

いつでも鹿島を守つてやれるわけではない　自分で言った言葉が、時の流れの残酷さを物語る。鹿島が襲われた日曜日は、俺はただ家について、安穩と過ごしていた。すべてをやり直せるなら、あの時駆けつけてやりたかったが　どんなにあがいてもできることではなかつた。

関にはすいぶん無理を言つた。全部終わるまで、余計な詮索をせずに請け負ってくれることに感謝する。

鹿島の明日を、本当の意味での『明日』へ戻す。明日ですべて終わらせる。終わらせてみせる。そのために、全力を尽くす。

覚悟は、もう決めた。

### 【土曜日】

金曜日に引き続き、朝には鹿島を迎えて行つた。鹿島が家にいるときはさすがに安全だろうが、それ以外でどんなことが起こるか分からぬ。今日は関に預けるまで、片時も田を離さないつもりだった。

鹿島も、俺の存在を確認するように時折こちらを振り返り、田が

合つと安堵した笑みを見せた。

午前中で土曜日の授業は終わり、鹿島が作ってくれた弁当を食べた。見た目はいまいちだが、味は悪くない。関の部活が終わるまで、一緒にクロスワードパズルをした。嵐の前の静けさなのか、ずいぶん和やかで楽しい時間だった。うつかり関との約束の時間に遅れてしまったが……。

鹿島を関に託して、俺は自分の準備にかかりた。まずは舞台上役者を揃えなければならない。中田に呼び出しの電話をかける。公衆電話から匿名で、不安を煽るように悪役ぶつて、約束を取り付けた。八幡神社に四時半。中田は必ず来る……。

次の準備として、厚手のさらしを買って家に戻った。昔趣味で作った通信機を探しだし、録音できるように改造する。家のありつけの缶詰を空け、平らにつぶしてさらしと一緒に腹に巻いた。この防具がどこまで持ちこたえてくれるかわからないが 下手をすればタイミングがずれて腹以外の箇所をえぐられかねない できる限りの準備をして、後は自分を信じるしかない。

すべての用意が整つてから、鹿島を迎へに行つた。関の丁寧な指導のおかげか、演武で鹿島は落ち着いた動作を見せていた。余計な予備知識は与えられないが、いくつか注文をつけて四通目の手紙に書かれていた内容を想像して指導させた。

過去に 鹿島にとつてはこれから未来 中田にこうやつて押し倒されていたのだ。その時の襲われる側の恐怖がどんなものであるか、男としての俺は想像し、わからうと努力することしかできない。最低で、卑劣な行動だ。

だが、俺も確かに抱いたことがある……そんな浅ましい感情を……。まぎれもなく自分の欲求の一部だった。言い訳できない。

しかし、そういうた押さえるべき衝動を押さえているからこそ、人間社会はからうじて均衡を保つて成り立つてゐるといえる。本能の赴くまま振る舞い、自分の欲求だけを満たそうとする愚かな行為を許すつもりはない。

鹿島の着替えを待つあいだ、関にもう一つの頼みを伝えた。さすがに、すぐに説き伏せることはできなかつた。理由も言えない。関の驚きや心配も無理はない……これからハ幡神社で鹿島の命を狙つている中田と対峙し、刺されて見せるというのだ。

俺はすでに覚悟を決めていた。その覚悟は、理由を示さずとも関にも伝わつたらしい。

「彼女のためか？」

そう問われて、返事は濁した。どうなのだろうと改めて思つ。今の俺でいるため、自分のためだと言い聞かせた気がするが……やはり鹿島のためなのだろうか……。

関と別れ、鹿島を連れて最後の決戦の地であるハ幡神社に向かつた。

神社の境内にあるちょいづビ良い草木の茂みに隠れて、俺は鹿島に最終通告をした。

犯人は英語教師の中田であること これから俺が犯人と対峙すること 鹿島自身も、口曜日にリープして中田と戦つてくる必要があることを……。

鹿島が動搖するのは無理もない。だが、こつして決着を着けるしかなかつた。

「他人事だから、気軽に行つてこいなんて言えるんだわ！」

鹿島の言葉が、俺の覚悟を一瞬揺さぶる。一瞬だけ……。今は手の内を明かせない。だから、なんと言われようと、鹿島のために鹿島にしかできないことをさせるしかなかつた。俺は、俺にしかできないことをする……。わざと突き放したように言つと、鹿島は言葉を失つていた。

まもなく中田がやつてきた。すでに舞台は整つている。レコーダーを鹿島に託し、俺は境内の開けたところに滑り出た。俺の存在に、中田は驚いたようだ。少しづつ中田との距離を縮めていく。

緊張……当然した。これから刺されるという恐怖は完全にはぬぐ

いきれない 死ぬかもしれない。

覚悟は、もうしていた。

恐怖を超越する強い覚悟で、俺は中田を強請る悪役を演じ続けた。証拠を見せろと言われ 僕は中田から視線を外し、内ポケットに手を入れる……。

外すなよ……！？

中田の手からくり出された銀色の刃物は、躊躇いなく俺の脇腹に沈む。鋭い痛みが一点に集中した。中田の狂氣を纏つた目がすぐそこにいる。口元には歪んだ笑みを浮かべている。クズ野郎が……。後方から悲鳴が挙がる。鹿島だ。

さあ、行つてこい、鹿島……！

耐え難い痛みの中で、俺はそれだけを思った。

次に気がついたときには、俺の目の前には鹿島がいた。後ろでは、関が身体を支えてくれていた。鹿島は泣きそうに表情を歪めていたが、怪我はないようだ。少し離れたところに、中田が仰向けてに倒れていた。

どうやら、うまくいつたらしい……。

その場にへたり込んだ鹿島に、俺は種明かしをした。状況を理解した鹿島は、感情を出しつくした。

「いつもいつもそやつて、自分だけで……もう。知らないから！」

鹿島の制御が効かない拳の責めを、俺はなすがまま受け止めた。死ぬほど心配をかけたのだ。教えるわけにはいかなかつたとはいえ、こんな風に泣かせたかつたわけじやなかつた……。

泣きじやぐる鹿島を胸で受け止めて、俺は心から謝った。

「うん……良かった……生きててくれて……」

鹿島の声が、俺の胸と心の奥底をくすぐった。

今はまだ、とても警察に納得がいく説明ができる自信も体力もなかった。元々そのつもりだったのだが、レコーダーもろとも後を關

に託すこととした。

前かがみの、少々情けない姿で帰路に立つ。鹿島が甲斐甲斐しく世話をやこうとするのを邪険にもできず、気恥ずかしさがこみ上げてくる。関が余計な入れ知恵をしてくれたおかげで、鹿島は俺のそばを離れようとなかった。なるべく鹿島が責任を感じないようにしたかったのだが、予想以上の衝撃で深くダメージを負ってしまったことが予定外だった。

薬局に寄つてから、亀の歩みの」とく俺の家までたどりついた。怪我のことが家族にばれるとまずいので、精一杯の虚勢を張つて、玄関の美幸をやり過いした。

俺の部屋に入ると、鹿島は少し落ち着きなく辺りを見ていた。一人で手当をするつもりだったが、関の入れ知恵の効力は続いていて、結局はされるがままになつた。

缶とさらしの下から現れた痣は、ひどい色をしていた。

「ひどい……」

鹿島のつぶやきに、背中がぞくりとした。鹿島の指先がそつと滑る、痛みと緊張でさらりと身体が強張った。痛々しい表情をした鹿島を見ていたくないのに、目が離せなかつた。

包帯を巻かれながら、鹿島のもつともな質問に答えた。

どうして逃げなかつたのか 選択肢はいくつかあつたが、選びたい選択肢は一つだつた。俺は逃げたくなかつたのだ。

結果、俺の頭を悩ませるもの、鹿島を脅かすものはもはやなく、タイムリープ現象も収束するはずだつた。ようやく、この事件は解決する。それと同時に、俺と鹿島の関係も終わりを迎える……。

鹿島が氣を使って動いてくれたおかげで、美幸に怪我のことを疑われることはなかつた。美幸は鹿島に興味津々だ。女を家に上げるのは珍しいからだろう。すっかり鹿島との関係を、誤解している。

鹿島は別に、俺の彼女ではない……。

ほどなくして関から連絡があつた。美幸に持つてこさせたコード

レスポンの手機を耳に当てる。その隣に、鹿島が並んだ。聞こえやすいようにと耳を寄せてくる無邪気な動作にわずかな苛立ちを覚えたが、その理由は考えないようにした。報告を終え、順序について釘をさしてくれた関は、最後に余計なひと言で締めた。

「突つ張るのもいいが、たまには負けろ。その方が、人間大きくなるぜ」「駄目？」

まったく……人の気も知らないで……。  
ともあれ、これですべて終わりだ。鹿島も無事で、俺の理論も間違いはなかつた。

実際に晴れやかな気分のはずだが、そう告げた時の鹿島はどこか上の空だった。

鹿島に手機を戻してもうつ間、警察への言い訳を考えていたが、ちつとも考えはまとまらなかつた。痛みのせいもあるが、それだけではない。理由は　あれだけ複雑なパズルも解いた俺だ　わからぬはずはない。

その理由を認めようとすると、俺の心は戸惑い始めん……。

不意に、鹿島が話しかけてきた。

「また、なにか怖い事が起こつたら、再発するんじゃないかしら」なるほど、その可能性はないとは言えない。

そうしたら、また俺に言いに来ればいい　俺を頼ればいい。考えるよりも先に、言葉は出ていた。だが、鹿島はさらに言いつつた。

「起こつてからじや、手遅れかもしれないじやないの  
なるほど、それなら……。

俺はこれからもずっと、鹿島のそばについてなきやいけないのか

からかうよいうな調子で言つて、俺は鹿島を振り返つた。そこに立つていてる鹿島は、何かを決心したような表情をしていた。

「駄目？」

その眼差しは揺らがない。

女という生き物は 浅はかで、ヒステリックで、そばにいられる  
と頭痛がしてきて 非常に厄介だ……ついこのあいだまで、そ  
う思っていた。

自分自身の苦い過去が思い出された。合わせて、闇の言葉が引っ  
かかってくる。女がすべてそうではないと、知つてはいる。これま  
での鹿島との関わりが、一瞬で脳内を駆け抜けていった。

鹿島は視線を逸らさない。俺だけを見ていた。

答えは……出ていた。

俺以外の人間を頼りにしている鹿島……どうしても、想像できな  
い。想像したくないという自分の心に気がついていた。鹿島が頼る  
のは、俺だけでいい。鹿島のそばにいるのは、俺でなくてはならな  
い。

鹿島が俺を信頼してくれたように、俺も素直な鹿島を信頼できる  
だろう。俺自身も、変わつていける。

鹿島は危なっかしくて、とても放つておけない。最初から最後まで、  
過去から未来まで……。

「ほんと？」

俺は、嘘はつかない。

「じゃ……」

晴れ晴れとした俺とは裏腹に、鹿島はまだ緊張を残していた。

「態度で示して」

鹿島の仕草が何を求めているのか、気がつくと同時に狼狽えた。  
鹿島は待っている。

狼狽えたが 目を閉じて頬を染めた姿に惹き寄せられるようこ  
動いた 俺は望んでいた。

華奢な肩をそつとつかんで 鹿島のほのかに赤い唇に自分のを  
重ねた。

肩に置いた手が、次の行き場を求めていた。鹿島を抱きしめたい

だが、その願いは叶わなかつた。次の瞬間、俺は思いつきり頬を叩かれていた。

「なにするのよー、いきなりー。」

突然の出来事。

痛かつた。俺はそのときの感覚をただ言葉にした。  
わけがわからぬまま顔の向きを戻すと、顔を赤くして狼狽えている鹿島が見えた。すぐに感情が顔に出るなどと考へてゐる場合ではない。

「若松くん……？」

いまさら何を言つてゐる……？

「なんで、若松くんがこんなところにいるのよ」

鹿島は何やらわめいてゐるが、それはひからいのセリフだ。さつきまで、あんなに良い雰囲気だったのに……この仕打ちはないだらう……。

鹿島はまるで初めての場所にいるように、あたりを見回した。

……！　なるほど！

タイムリープはまだ終わつていなかつた……ここにいる鹿島は、過去の鹿島だ……！

最後のピースがはまる。相談を持ちかけてきた水曜日、俺の家に行かなかつたかと尋ねてきたのは、これだ……。

笑いがこみ上げてきた。やられた……。

先ほどまで忘れていた脇腹の痛みが蘇つてきた。笑うとかなり痛い……。

笑いと痛みで震えている俺を、過去の鹿島は呆れたように見ていた。説明をしてほしそうだが、教えられない。現に、いまの鹿島では理解できない。

鹿島は諦めて、部屋を出て行こうとした。鹿島にとつては夢とも思えるような状況に違いないだろう。ほとんど接点がなかつた俺の家にいて、あまつさえキスをしたというのだから……。

卵が先か鶏が先か。最初に意識したのは、どちらだらう……。

脇腹の痛みを堪えながら、俺は続いて廊下に這い出た。一応、最初で最後の応援だけはしてやるつと想つた。

鹿島が落ちる前に、積まれたクツ・ションが見えた。俺と同じ、用意周到なことだ。

けたたましい音が届いたのか、美幸がキッキンから姿を現した。階段落ちは鹿島の趣味などという俺の言葉を、当然冗談だと思つていたのだろう。本当に落ちてきた鹿島を見て驚いていた。

俺はゆっくり階段を下りて、座り込んだままの鹿島に左手を差し伸べる。そして、ようやく帰ってきた旅人にふさわしい言葉を投げかけた。

鹿島は美しい笑みを浮かべていた。今度こそ本当に、鹿島は俺と同じ時空の流れの中に帰ってきた。

「これから、未来に何が起こるか、誰にも分からぬ。だが、だか  
らこそ、俺たちは自由に時を刻んでいける。鹿島が教えてくれた。

鹿島翔香。

「これほど俺を振り回しておきながら、俺を惹き付けてやまない。興味深い女だ。

(後書き)

未熟な文章を読んでいただき、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5317j/>

---

かしましうか

2010年10月8日15時24分発行